



2017年、東京のカナダ大使館でのオスカー・ピーターソンの胸像(ルース・アパネシー作)除幕式(左から:ルース・アパネシー、元大使イアン・バーニー、セリーヌ・ピーターソン、カナダ人ピアニストのロビ・ボトス)

んのお話をよく聞いています。今回は来年お父様のオスカーさんの生誕100年ということで特にお父様とのかかわりや隠れたエピソードなどをお伺いしたいと思います。ジャズを良く知らない人でもオスカーさんの名前はよく知られていて日本にも多くのオスカー・ファンがいますし、日本をはじめ世界中のジャズミュージシャンに大きな影響を与えています。

**Celine** 日本は、まず何よりも父にとって特別な場所であり、それは私にも受け継がれました。私が初めて日本を訪れたのは生後5、6か月のときでした。母が時々送ってくれる写真があるんですが、私たちがレストランで座っていて、父が箸で何かを食べさせてくれている姿が写っています。私は椅子で口を大きく開けてその食べ物をもらおうとしているんです。日本は父にとって非常に重要な場所であり、それは主に、日本の観客やミュージシャンが音楽に対して特別で深い理解と温かさを持っているからです。ですから日本にはいつも愛と感謝の特別な思いがありました。来年、父が100歳になるというのは本当に信じられないことです。

そういえば、ポールは2019年に、ジャズ・アット・リンカーン・センターで父を称える公演に参加してくたんですよ。ケニー・バロン、ジェフ・ハミルトン、ジョン・クレイトン、ジェラルド・クレイトンなど、超一流のミュージシャンが参加したイベントで、ポールは素晴らしい存在感を示しました。

ポールはシカゴに住むピアニストで才能あるシンガーのオードリーの友人で彼女から紹介されて以来の友人です。オードリーは父の親友で彼女のことを「シカゴの家主」と呼んでいたんですよ。シカゴに行くときにはいつも彼女の家に泊まっていたから。ポールもオードリーも私の人生にとって非常に重要な存在です。それぞれがお互いに人生の喜びと美しい思い出を共有しています。

**海原** すごいつながりですね。お父様、その親友のオードリーさん、その親友のポールさん。オスカーさんはあたたかい人柄だったと聞いています。セリーヌさんは、若い方のサポートや才能を大事に伸ばすような音楽プロデューサーのお仕事をされていますが、それはお父様から受け継いでいるように見えます。今若手音楽家たちのワークショップや支援活動、それに講演などをなさっていますね。

**Celine** そうですね、父は非常に温かい人でしたが、とても厳しい一面もありました。私の最大の望みは、父が私たちの仕事を誇りに思ってくれることです。私は確かに多くのことを父から学び、それを受け継ぎたいと思います。遺産にはさまざまな意味があり、それが音楽である必要はありません。偉大な個人から私たちに伝えられる多くの教訓があり、彼の影響は、私たちが行っているすべてのことに確実に感じられます。

**海原** 音楽だけでなく、お父様が音楽を通して表現した精神こそが遺産ということですね。そんなお父様のエピソードを教えてください。

**Celine** 父がナイトクラブで演奏する際、私はほとんどいつも一緒にツアーについていきました。彼が日本で最後のツアーを行ったのは、2004年だったと思います。私たちは東京、大阪、札幌、名古屋、福岡のブルーノートを中心に巡りました。各都市で一週間滞在し、二回公演を行い、六夜続けました。そして、休みの日に次の都市へ移動し、また始めるという長いスケジュールで私は、毎晩父がホテルに戻ってくるまで待っていました。

**海原** 夜中まで起きていて大変でしたがお父様と話したかったのですね。

**Celine** 私は幼い頃から内部時計が逆転していて、学校に行くために起きるべき時間に寝ていたり、すべてが逆さまになっていましたが、父が帰ってくるのを待つのが大好きでした。毎晩、彼が戻ってくると、彼は観客や出会った人々について話してくれました。彼は待っているすべての人に挨拶することで有名でした。彼は全員にサインをしていました。

**海原** 希望者全員にサインですか？ それはすごいことですね。  
**Celine** ええ、公演後の楽屋でも、観客が戻ってきて、彼がサインをし、話をすることができましたし、もし外に出るときには、車に乗り込んでから同じことをしていました。

このツアー中、彼は特にある若い女性について話し続けていました。彼女はほぼすべての公演に出席し、すべての都市のすべて

スポーツ紙に掲載された「高松宮殿下記念世界文化賞」受賞時のオスカー・ピーターソンのインタビュー記事。セリーヌと妻、ケリー夫人が写っている



1991年来日時の父オスカーとセリーヌ。レストラン、そしてホテルのテレビでの相撲観戦。オスカーのセリーヌへの溺愛ぶりが伝わってくる

のクラブに来ていたのです。彼女はおそらく20代の初めだったと思います。彼女と一緒に撮った写真もどこかにあります。彼女はただそこにいただけでなく、第一列目か第二列目に座り、彼の手元を見つめ、演奏中ずっと泣いてたそうです。父は家に帰ると、あの若くてかわいい泣き虫の女の子がまた来たと言うんです。ツアーの最後の日、父は、泣いている彼女をステージに上げ、抱きしめて紹介し、演奏の後、父は彼女と話をしていました。父は若い人たちが音楽の旅を始めるきっかけを作っていたのだと思います。

**海原** その女性は一生の思い出になっているでしょうね。それをきっかけに音楽の旅を続けているのでしょうか。お父様いつも近くで接していたからこそ、そうした素敵な出会いを見ることができる機会があったんですね。

### ファンとの温かいふれあい そして家族との大切な時間

**Celine** 父は年長の子供たちに対してとは違う形で父親であろうとしていました。なぜなら、彼らを育てたのは60年、少なくとも50年前のことだったからです。私はとても違った育ち方をしました。父と一緒にツアーに出かけることができたし、家でも彼と過ごす時間がありました。それは本当に宝物だと思っています。でもなかなか大変なこともあったんですよ。例えば、父が学校のイベントに来た時、他の親やほとんどの先生たちは父と話したがって…父はただ親として私と一緒にいたいだけなのに、それが難しかったのです。

**海原** お父様はスターですからそうなりますよね。  
**Celine** 家族の時間は父にとって非常に重要な時間であり、父はただ一人の人間でありたかったのだと思います。彼はその両方の役割を優雅にバランスさせるのが非常に上手でした。

**海原** オスカーさんのミュージシャンとしての一面、そしてご家族とのかかわりで感じられる人間としての一面をお話くださりありがとうございます。日本でもメモリアルの公演を聴けたらどんなにいいだろうと思います。日本のオスカー・ファンの方に伝えたいことなどお聞かせください。

**Celine** すべての日本のオーディエンスやミュージシャンに感謝したいと思います。日本のオーディエンスからのサポートの重要性を実感しています。日本の文化と、その文化の中にある素晴らしい人々の寛大さ、優しさ、愛、尊敬の証です。アート、文化、音楽がこれほど大切にされていることに感謝しています。日本にいるととても居心地の良さを感じます。友達に聞いてもらえば分かると思いますが、私はいつも「いつか日本に移住したい」と話していますので、いつかその夢が叶うかもしれません。すべての人が音楽にアクセスできるようにし、楽器を手に取りたいと思うすべての人がそれをできるようにすること、そして彼らが先人から学べるようにすること。リスニングやクラス、ワークショップに参加できるように父の思いを受け継いで伝えていきたいと思っています。

**取材後記** セリーヌさんは講演やワークショップを企画して若い人たちが音楽に出会える機会を作る仕事をしています。人を大事にして音楽の旅を作るきっかけをつくらうという思いはオスカーさんから受け継いだ大きな遺産なのかもしれません。今回は人と人の繋がり不思議を感じた対談になりました。オスカーさんのすべてのライブを聴いた泣き虫のかわいい女性は今どうしているのだろう、と思いました。

文中に登場するオスカーのライブの全国全てで1番前の席で泣きながら聴いていたという女性

